ふるさとのお宝再発見 ㉑

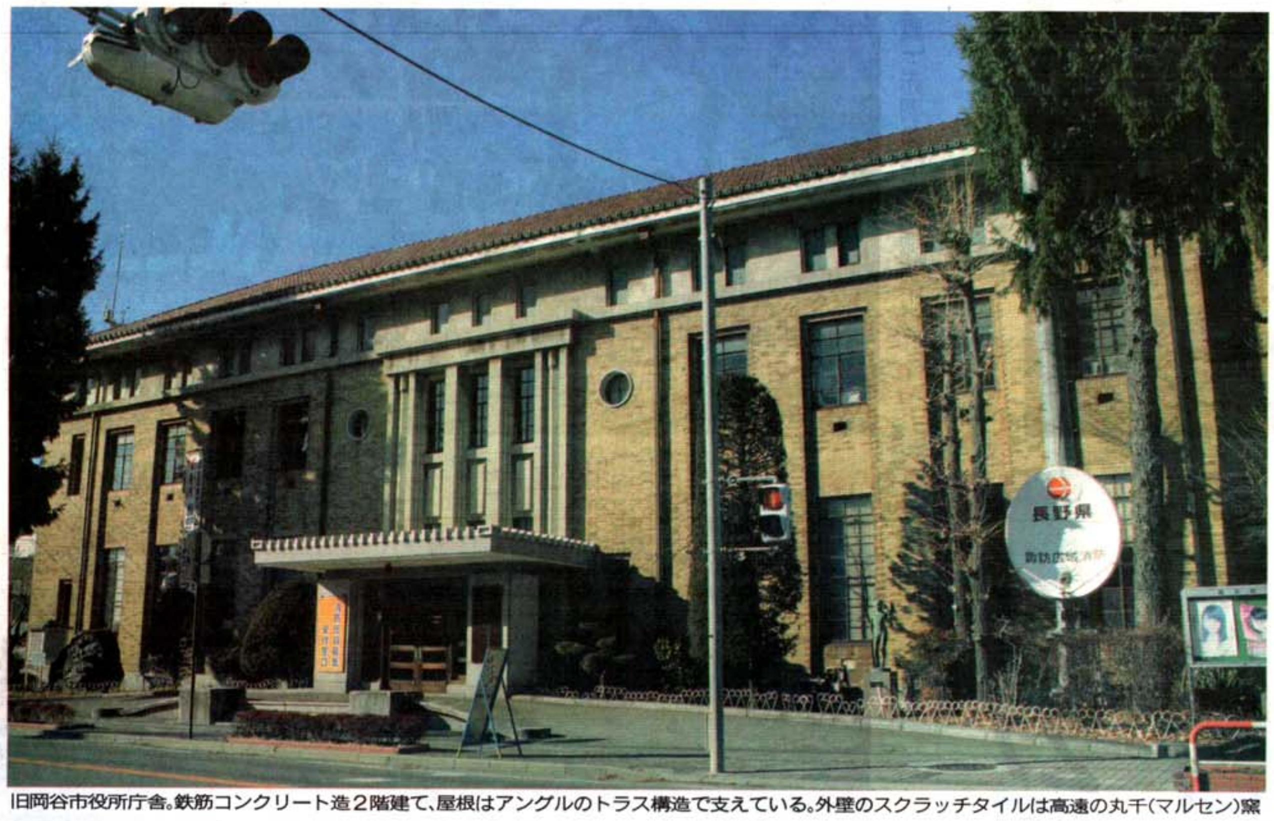
市民新聞グループの土曜特集
週刊 見る

この特集をさらにご希望の方は、新聞販売店かお近くのコンビニでお求め下さい

国登録有形文化財 旧岡谷市役所庁舎（現消防署庁舎）

設計者（長野県営繕課技手）

三苫繁実中尉 沖縄戦に散る!?



旧岡谷市役所庁舎。鉄筋コンクリート造２階建て、屋根はアングルのトラス構造で支えている。外壁のスクラッチタイルは高遠の丸千(マルセン)窯

第2次世界大戦、沖縄防衛軍は「第32軍」と呼ばれ、11万6400人が従軍していました。「鉄の雨」「鉄の暴風」と言われ、地形が変わるほどの砲撃を受け、日本側の死者、行方不明者は18万8千人余という悲惨な戦いでした。この32軍の300人ほどの部隊を率いていたと思われる部隊長に諏訪に縁のある2人の知った名前を見ることができます。

その1人は、第4遊撃隊隊長・岩波壽大尉で、諏訪市中金子の岩波家の長男として生まれ、旧制諏訪中学校、陸軍士官学校を卒業。陸軍中野学校を経て従軍、沖縄で終戦を迎え帰郷。諏訪土木建築に入社、現在のスワテック建設の社長、会長を務め、県建設業協会副会長、諏訪商工会議所副会頭など地域の要職を歴任し2011（平成23）年2月24日、91歳で亡くなりました。沖縄戦での遊撃隊の戦いぶりはネットで検索でき、生還できたことも希有であり、その活動はまさに英雄です。

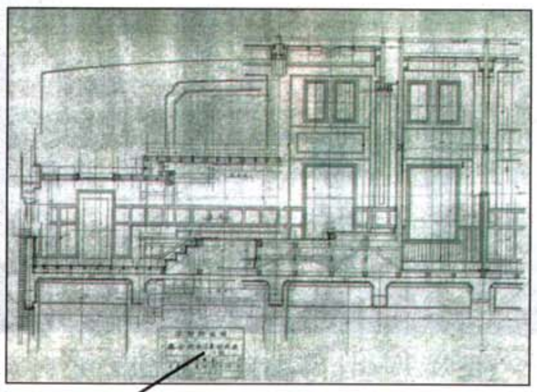
もう1人は、要塞建築勤務第7中隊隊長・三苫繁実中尉。旧岡谷市庁舎の設計者です。私がこの「三苫」という図面に記されたサイン＝左下写真＝に出会ったのは、2003（平成15）年。この建物の耐震診断を担当し、旧庁舎の図面「表紙、平面図（1、2階）、立面図（4面）、詳細図（8枚）、構造図24枚）、建具表、衛生設備図、電気設備図（2枚）―計44枚」（岡谷図書館で閲覧可能）を詳細に見る機会を得、その後書籍や資料に「長野県営繕技手　三苫繁実」の名を見つけ、確信したことによります。三苫の設計した建物は現在では松本深志高校本館・講堂（昭和8年）、長野高校旧南校舎（錦鶏会館、昭和14年）が残存しており、ともに登録有形文化財となっています。

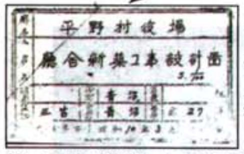
岡谷市から県立歴史館に照会してもらうと、下図の返信がありました。これを読み込むと、昭和6～7年頃軍隊に招集され、工兵としての訓練を受け、医学を修めた人が有事に軍医として従軍するように、要塞建設のために有事に従軍する立場にあったかと想像されます。「工兵少尉」という軍隊の階級によって正八位の官位も与えられたことがわかります。

1、大正13年度の「長野県職員録」に土木課の「県吏員」として「月五〇　三苫繁實」と見えるのが初見。2、昭和2年の「長野県職員録」では、営繕課の「建築技手」として「月五〇（技手月一警察技手月一〇）　三苫繁實」とみえる。3、昭和4年の「長野県職員録」では、営繕課の「技手」として「月一　営繕技手(月五三)　警察技手（月一二）　三苫繁實」とみえる。4、理由は不明だが、昭和6年の「長野県職員録」の営繕課には三苫の名前がない。5、昭和7年の長野県職員録は歴史館では所蔵していない。6、昭和8年の「長野県職員録」の営繕課の技手として、「月一　営繕技手（月七二）工兵少尉　正八　三苫繁實」とみえる。7、昭和9年の8年に同様。8、昭和10年の「長野県職員録」の営繕課の技手として「月一　営繕技手（月七六）工兵少尉　正八　三苫繁實」とみえる。なお、昭和11年から昭和20年の職員録は歴史館に所蔵していません。また、昭和21年の職員には三苫の名前はありません。

32軍を調べると、司令官・牛島満中将以下幹部の集合写真があります。この中にこの2人はいるのでしょうか。2人は面識があったのでしょうか。

図面は青図が1冊だけ残っているだけですが、ディテールは丹念に書き込まれ、綿密な検討、検証の後に描かれていることに感激します。手描きの図面の美しさに感動します。構造図が非常に多いのは、当時は土木の設計図と同様に詳細な配筋の図面を書きながら積算ができて、加工図も兼ねられるような作図方法であったからです。





平野村役場
廳舎新築工事設計書

2階議場の詳細図㊤と図面枠の拡大㊦。元図は青図（青地に白抜き）であるが、この図は白黒反転した図である

旧市庁舎の東側に、大変立派な御影石の覆い屋に寄付された尾澤福太郎翁の銅像（武井直也作）があります。覆い屋の裏側に翁の顕彰額が埋め込まれていますが、読まれた方も少ないと思うので全文＝下の写真下＝を紹介します。岡谷市史中巻の129㌻には「翁は十数万円を投じて新築し昭和11年3月29日村へ寄付した」とありますが、施工者である野口誧一氏（岡谷組・当時44歳、1891～1991年）の社史「夢を馳せて」の216㌻には、野口氏は当時の村長今井梧楼氏から信頼され、鉄筋コンクリート造の建物建設の経験も豊富であって、当然のことのように尾澤福太郎から請負金額8万1千円（セメント・付帯工事を除く）で特命受注したとの記載があります。当時はセメントや鋼材は大変貴重で、特にセメントは調合がきちんとされたか判断するため、材料は支給、使用後のセメント袋は検品されたと聞いています。

以上の内容と今井家に伝わる話から判断すると、①村制から市制への移行には所轄の内務省の適格要件として「庁舎が整備されていること」という一項があり、昭和2年の金融恐慌以来の厳しい経済状況を熟慮した今井村長は尾澤福太郎翁に寄付を依頼（内務省から調査に来たのは後に東京都知事となる鈴木俊一氏であったそうです）②「一晩考えさせてください」といった翁は翌日、これを快諾③村では鉄筋コンクリート造りの設計者として近在に適任者がいないことから、長野県に相談・依頼④県はこれを受諾、営繕課に設計監理させることとし（当然金銭のやりとりはあったか）、三苫を中心に青沼、清水、戸谷、青沼（市）、加藤、芳賀らが担当⑤工事は県に準じ、セメントなどを支給⑥岡谷組の野口誧一氏が特命で尾澤福太郎から受注、使命感に燃えて厳しい冬期の工事を克服、耐久性が高く、品格のある建物を立派に完成⑦完成後尾澤福太郎氏が精算、建物を寄付採納した―と考えられます。総事業費は十数万円ということですが、付帯工事の明細や設計監理料、セメント、その他支給品の金額が不明なため　断定できないのは残念です。なお、建設当時の便所は水洗便所で、諏訪地方で初めての水洗ではないかと言われています。

覆い屋の裏側に埋め込まれている顕彰額

尾澤福太郎翁頌徳記
尾澤福太郎翁ハ万延元年岡谷村ニ生マル　尾澤
家ハ本地製糸業ノ先覚ナリ　翁先考ヲ輔ケテ明
治十一年機械製糸業ヲ肇メ明治二十七年以来尾
澤組ヲ主宰シテ拮据精励漸ク其規模ヲ拡大シ全
国各地ニ工場ヲ設置シ本邦屈指ノ大製糸家タル
ニ至レリ　大正十二年組織ヲ更メ株式会社尾澤
組ヲ創設シテ社長トナリツイデ尾澤組ハ片倉製
糸紡績会社ニ合併シソノ常務取締役ニ就任シ以
テ今日ニ及ベリ　翁ノ斯業ニ盡瘁（※ジンス
イ・苦労を顧みることなく、全力を尽くすこと）
スル事実ニ六十年ニ垂ントス　其間或ハ支那繭
輸入ノ端ヲ開キ或ハ米国ノ絹業ヲ視察シテ経営
ニ改良ヲ加ヘ或ハ平野村工場内ニ工女養成所ヲ
設ケ之ニ私立尾澤組実科女学院ヲ併置シタル等
斯業ノ発達向上ニ貢献シタル所眞ニ大ナルモノ
アリ　翁資性温良恭謙最モ公共ノ念敦ク社会公
益ノ為ニ盡クシタル所挙ゲテ数フル可カラズ
今回岡谷市ノ誕生セントスルヤ翁ハ巨資ヲ投ジ
テ輪奐タル庁舎ヲ建築寄附セラル　市民ノ謝意
寔ニ切ナリ　因ツテ本市ハ翁ノ銅像ヲ構内ニ建
テ永ク其徳ヲ後昆ニ傳ヘントス
昭和十一年五月　岡谷市

建物は78年という風雪に耐え、煙突の撤去や重なる改修を経て、劣化も進み、近い将来どのように利用されるべきかの検討の後に大規模な改修工事が必要とされる時期が来ています。多くの人の思いの込められた建物が「製糸岡谷」の歴史の象徴として、末永く燦然と光り輝くことを願ってやみません。

さて、今井梧楼氏の孫が現岡谷市長の竜五氏、岩波壽氏の長男が現諏訪商工会議所会頭の寿亮氏、岡谷組の野口誧一氏の孫が現岡谷商工会議所の副会頭の行敏氏であるとは、時の流れの不思議さ、あやなす人生の機微、いかなる強き星のもとに生まれてきたのかと驚かされるのは私だけではないと思います。

三苫繁実氏のご遺族を捜していますが、なかなかたどり着きません。沖縄で要塞の建設に東奔西走し、戦死されたと思われる設計者三苫繁実氏のご冥福を心からお祈りします。

（岡谷市文化財保護審議会委員で、諏訪総合設計代表の宮坂正博さんに執筆していただきました）

次回は茅野市の「上之段遺跡と駒形遺跡」を紹介します。

旧岡谷市役所庁舎の東側に建つ尾澤福太郎翁の銅像